論文

覗きからくり、「からくり」考

坂　井　美　香
SAKAI Mika

1.「からくり」という語

本稿では、覗きからくりの「からくり」について考察し、外来の覗きからくりがどのようにして日本の文化体系に取り込まれたのか、その一端を明らかにしたい。

「覗きからくり」とは、レンズを填めた覗き穴から箱の中に仕掛けられた絵や人形を見る装置である。このような覗き見る見世物を、英語では“peep-show”または“raree-show”、フランス語では“boîte d'optique”、オランダ語では“optiques”、“rarekiek”、または“kijkkast”、ドイツ語では“guckkasten”、イタリア語では“mondo nuovo”、中国語では「拉洋片」ないしは「西洋鏡」と呼ぶ。

同じような性格を持つ道具（もの）を表す言葉が中国や日本にあるということは、祖を同じくする箱の中を覗く見世物文化が西欧諸国、中国や日本に存在することを示している。

しかしながら、日本に現在、保存されている大正期制作の覗きからくり（図1）は、西洋のものとあまり似ていない。レンズ付きの穴から箱の中を覗くことは共通するが、大きさ、外形、装飾など日本独自のものである。大きさや飾り方がまるで違う[(1)]。日本に現存する覗きからくりは組み立て式で、高さ3〜4メートル、1度に10〜17人程が覗け、飾り看板や屋根がある。それはすなわち、日本の物売り文化が外来の視覚光学的見世物を取り込み、日本独自の覗きからくり文化を展開した結果だといえる。日本における視覚光学史、見世物文化史を考える上で、「覗きからくり」の受容、発達を考えることが大きな意味を持つと筆者が考える所以である。

前述したように覗きからくりの呼称は世界の言語の中にそれぞれあるが、それらの呼称が意味するところは同じではない。英語のpeep-showは「覗く見世物」を意味し、raree-showは「珍しい見世物」を意味する。フランス語のboîte d'optique、オランダ語のoptiquesは「光学の箱」、つまりレンズを用いた装置を意味し、オランダ語のkijkkast、ドイツ語のguckkastenは「覗く箱」を意味する。イタリア語のmondo nuovoは「新

図1　覗きからくり　旧巻町（現新潟市）巻神社にて
斎藤文夫氏撮影（1983年）

しい世界」の意である。また、中国語の「拉洋片」と「西洋鏡」は、それぞれ西洋画を引く装置、西洋から来た（または西洋画を見せる）レンズ付き装置を意味する。

異なる言語で、同じような装置に対する呼称がそれぞれに異なって与えられているということは、その装置の移入時に同じような音による呼称を付与せずに、その装置の性格をもとに名前を呼んだことを示している。(2)

一方、日本では同じような装置を、ノゾキカラクリ、カラクリノゾキ、ノゾキ、カラクリ、メガネと呼ぶ。「ノゾキ」の意は「覗く」であるから箱の中を覗き込むことにつながる。また、「メガネ」はレンズの意であるからレンズを用いた光学装置としての性格を示している。「ノゾキ」も「メガネ」も他の言語との共通性がある。しかしながら、「カラクリ」については、他の言語と共通性がない。他の言語との共通性がないことに加え、「カラクリ」の漢字表記には、「絡繰」、「機関」、「機巧」などが当てられる。これらのことは、何らかの「カラクリ」的要素がレンズ付きの穴から箱の中を覗き込む装置に加わり、日本で独自のものとなったことを示している。

何が「カラクリ」で、どう「絡繰」、「機関」、「機巧」なのか。外来の見世物文化を日本に取り込み、成長を遂げる過程で、どのようにか「カラクリ」が加わったのだろう。日本の覗きからくり文化を考える上で、「カラクリ」について検討する必要がある。

本論文においては、覗きからくりの「カラクリ」についてその意味と由来、「カラクリ」の呼称定着とその後について考察を行っていくことにする。

2. 先行研究における「カラクリ」の説明

「カラクリ」の検討を行うにあたり、先行研究における覗きからくりの「カラクリ」に関する説明を確認しておきたい。

まず、山本慶一の主張である。山本は、『のぞきからくり』〔山本 1973 年(3)〕において野天興行用覗きからくりに限定して丹念に資料の収集を行い、その主張を展開している。山本は、覗きからくりが日本で誕生したことを前提とし、その「カラクリ」については、以下のように主張している。

> しかし上方や江戸で大評判をとった全盛期の竹田芝居の人気はたいしたもので、竹田からくりの名跡は後世までそれら類似のものの代表名となった。この竹田からくりは歌舞伎より木戸銭が安かったが、庶民のだれでもが容易に見物できるというわけのものでもない。だからこの竹田からくりの人気に乗じて、街に竹田からくりを模倣小形化した「のぞきからくり」があらわれ、専ら児童たちの渇をいやすこととなった。〔山本 1973，p14〕
>
> このように発生当時の「のぞきからくり」は今のように絵画の類を見せるのではなくて、動く造り物、則ち竹田からくりの模倣をみせたのであった。〔同 p18〕
>
> ではそのようなからくりののぞきが、今のような画劇式ののぞきに変わってくるのはいつの頃なのか。それを知るにはまず浮絵と眼鏡絵についての知識をもっておかなければならない。〔同 p28〕

以上３つの記述をまとめると、上方や江戸で竹田芝居が全盛期となり、街頭に竹田カラクリ芝居を模倣小型化した覗きからくりが現れ、動く造り物、則ち竹田からくりの模倣を見せ、その後、画劇式の絵を見せる覗きからくりに変わったということになる。

次いで岡泰正の主張を見ておきたい。岡泰正は、その著書『めがね絵新考』〔岡 1992年〕[(4)]で反射式覗き眼鏡を中心にその渡来から覗き眼鏡を用いて見る眼鏡絵について検討を行っている。岡は「のぞき眼鏡」を「反射式覗きめがね」と「直視式」とに分け、「直視式」がいわゆる「のぞきからくり」であるとし、ヨーロッパから中国経由で日本に渡来したと想定している。その中国から渡来した1740年代以前の覗きからくりについて、

> 絵ではなく、人形からくりを箱の中で見せ、飴などを売っていた大道商人の存在を考慮に入れなければ、こうした推論は的外れになるだろう。〔岡 1992, p71〕
>
> 一八世紀前期では、絵画であっても伝統的表現であったと思われ、多くは、からくり人形を大和絵的表現の背景の中で動かすもののようだったようである。〔同 p98〕

とし、透視画を見せる西洋覗きからくりが中国で人形を見せるものになり、日本に渡来し、大和絵を背景に人形を動かして見せたと推測をする。

覗きからくりの「カラクリ」はどこから生じているか。山本、岡の主張は、覗きからくりの渡来の問題と共に、箱の中に人形のカラクリを仕込む発想がどこで生じたかという課題があることを示している。

覗きからくりが渡来したものか、日本で発生したものなのかという問題を考えるとき、ガラスレンズの存在がポイントになる。近世日本では、ガラスはガラス片として輸入され、または眼鏡として輸入されていたため、ガラスレンズを塡めた覗きからくりが日本で発想されたということは考えにくい。そうなれば、覗きからくりは西洋に起源を持つか、中国に起源を持つかということになる。

以上のように覗きからくりの起源と渡来を考える課題は存在するが、検証の限界を予測するものではある。まずは「カラクリ」に注目し、覗きからくりの「カラクリ」がどこから生じているのか考えてみたい。

3. 西欧の覗きからくり５種

覗きからくりの「カラクリ」を検討するにあたり、ドイツで見たGuckkastenとオランダで18世紀後半に多く作成されたOpticakastを確認しておく。覗きからくりが西洋から渡来したとなれば、何らかの共通性があるだろうからである。

日本の覗きからくりと同じ形式、つまり、レンズを覗くと正面に絵がある直視式の装置は、西欧の図像資料や陶器資料に見出すことができる。絵画や陶器に作られるほど、それなりに多く存在し、見世物師たちは装置を担いでフェスティバルや地方回りをしていたと考えられる。しかしながら、実物の直視式覗きからくりはあまり多く見ることはできない。[(5)]

西欧諸国でよく見る実物資料は、レンズと鏡を利用した反射式の覗き眼鏡であり、前面光のみで画

を見、背面光を利用しないタイプが多い。また、イギリスでPeep-showというと、何枚かの切り抜かれた絵や板を組み合わせて立体風景を作り覗き穴から覗かせるものをさす場合も多い。鏡を用いず、レンズを通して直接に箱中を見る覗きからくりは数少ない。

これから紹介する5点は、いずれも可搬型で1人で持ち運びが可能な大きさである。まず、図2である。図2はフィルム博物館　デュッセルドルフ所蔵のGuckkasten（フランス製、1805年頃）である。このタイプは、木製でそのまま背負って移動する。2個のレンズ付き覗き穴を持ち、両眼で覗くようになっている。箱の中には、背景の前に3段に切り抜かれた画が差し込まれ、立体感のある空間を作っている。人間や銅像が浮き出して見える。

図3は同じくフィルム博物館　デュッセルドルフ所蔵のWander-Guckkasten（フランス製、1830年頃）である。2個の大レンズと2個の小レンズを持つ。箱の側面に鉤が取り付けられているが、これに紐やベルトを通して担いだものだろう。箱の中は劇場のステージのようになっている。舞台の両袖に柱やカーテンが三重に切り抜かれて立てられ、背景は遠近法で描かれた建物内部と人々で構成されている。覗き箱の側面には長方形の穴（22.5×3.5 cm）が開けられている。ここからおそらく紙製

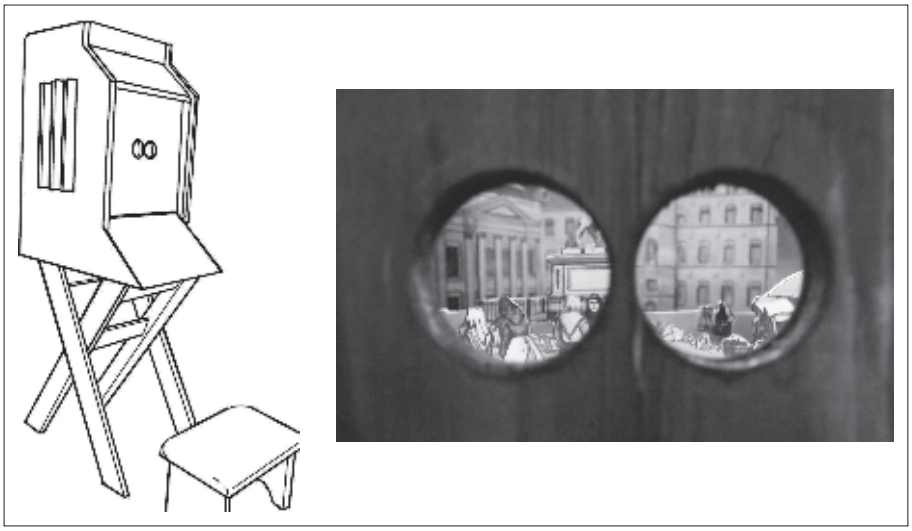


図2　Guckkasten （フランス、1805年頃　複製）　ドイツ　デュッセルドルフ　Filmmuseum Düsseldorf蔵

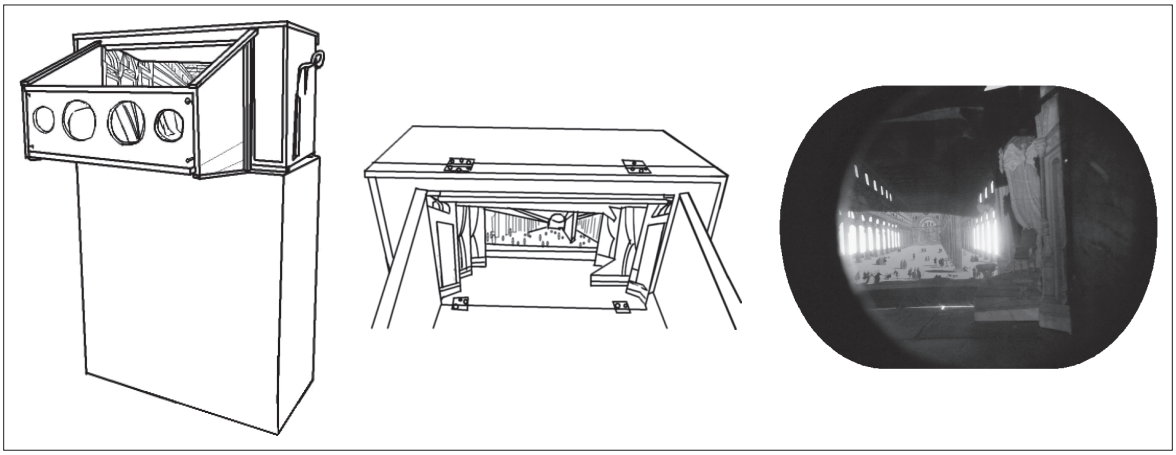


図3　Wander-Guckkasten mit 4 Gucklinsen （フランス、1830年頃）　ドイツ　デュッセルドルフ　Filmmuseum Düsseldorf蔵

の人形などを差し入れ、動かしたのではないかと思われる。

図４は、ドイツフランクフルトにあるドイツフィルム博物館所蔵の Guckkasten（1880 年頃）である。木の枠組みに皮革が張られ、上面に採光用の窓がカッティングされている。側面はややカーブして、背面に向かって広がっている。背面には遠近法で構成されている絵を填め込むように溝が切られている。ゆえにこの絵は差し替えが可能である。絵には光を通す部分が切り抜かれ、裏面から赤や黄色、青などの布きれが貼られている。両眼でレンズを覗くようになっている。レンズを覗くと遠近感のある風景が見え、背面から光を当てれば夜景となって浮き出すようになっている。

図５は 18 世紀後半にオランダで多く製作されたという[(6)]伸縮式覗き箱である。このタイプは室内用と思われ、折りたたんで蓋をすると箱状になる。前面に２つのレンズ、一番後面にはろうそく立てが取り付けられている。絵を溝に入れて立たせ、背面からろうそくの明かりで照らす構造になっている。絵は遠近法で描かれていて、切り抜かれた明かり窓には、赤、黄、青、緑、白などの塗料が塗られている。

図６はドイツのヴュルテンベルク州立博物館（Landesmuseum Württemberg）所蔵の Jahrmarkts-Guckkasten mit Trageriemen, mit farbigem Papier beklebt（着色紙張り　移動用縁日用覗きからくり）である。名前の通り、木の箱に模様付きの紙を貼り、革ベルトで背負って運ぶようになっている。

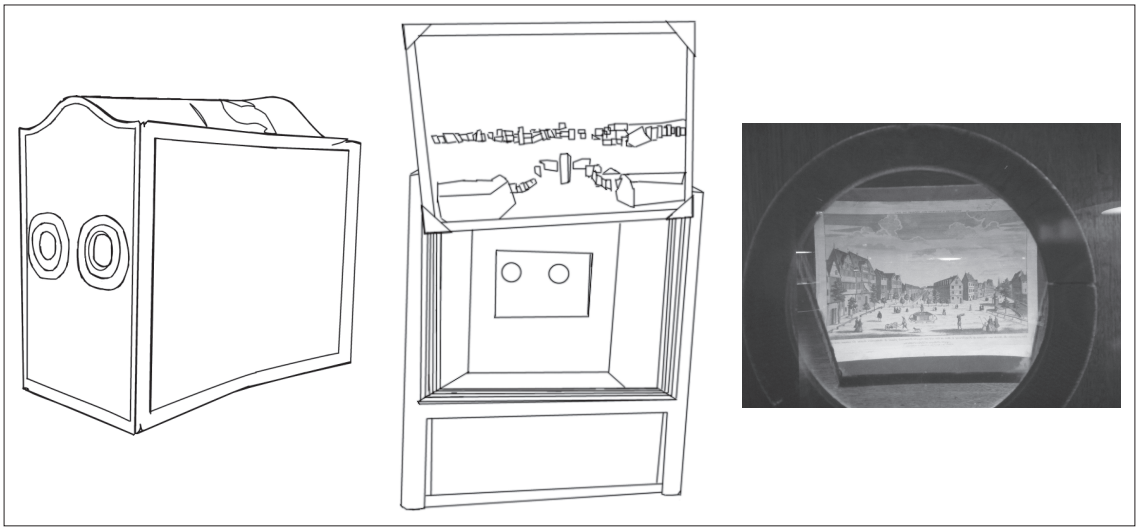


図４　Guckkasten （1880 年頃）　レンズ径約 5.4 ㎝　ドイツ　フランクフルト　Deutsches　Filmmuseum 蔵　左：全体像　中央：背面から見る　右：レンズを覗く

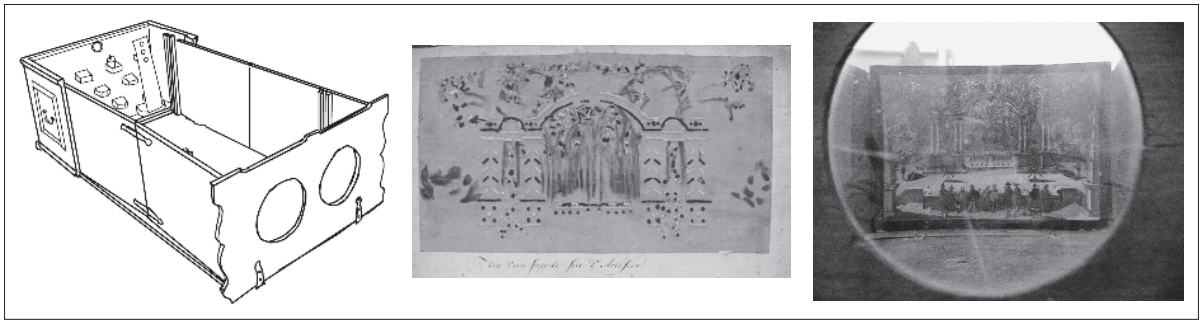


図５　Opticakast met 2 Kijkglazen en Kaarsenhouders （２つのレンズ付き覗き箱）　32×50×97 ㎝　オランダ　アムステルダム　Theater Instituut Nederland 蔵

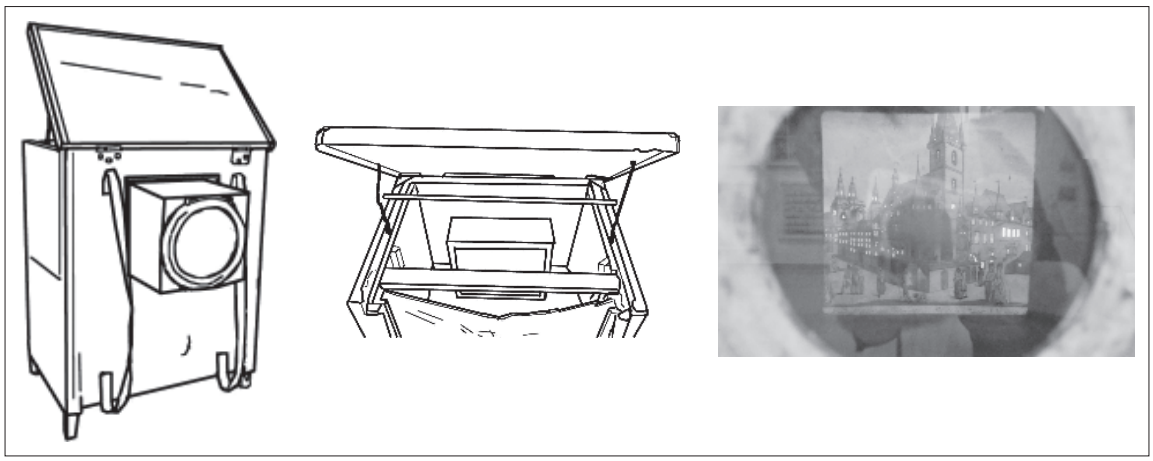


図６　Jahrmarkts-Guckkasten mit Trageriemen, mit farbigem Papier beklebt （着色紙張り　移動用縁日用覗きからくり）（年代不明）　ドイツ　ヴュルテンベルク　Landesmuseum Württemberg（Außenstelle Museum für Volkskultur in Württemberg, Waldenbuch）蔵

レンズが取り付けられた四角い箱部分は、覗き箱内部に引っ込むようになっている。上蓋は開け閉めができ、採光を調整できる。レンズと反対側には、厚紙でできた絵を差し込むようになっている。自然光を利用し、夜景を作り出すことができる構造になっている。やはり、絵は遠近法で描かれていて、切り抜かれた明かり窓には、赤、黄、青、緑、白などの塗料が塗られている。

図２から図６までを見てみると、図２、図３の覗きからくりは18世紀前半のピープ・ボックス（Peep-box）のごとく、中央部分を切り抜いた何枚かの絵を組み合わせて奥行きのある空間を作り出し、その空間そのものを見せたり、その中で人形を動かしたりしたことがわかる。

図４と図５は、昼景と夜景を見せる仕掛けになっている。背面光を利用し、赤、黄、青、緑などを浮きあがらせるようになっている。その仕掛けは、日本の1770年以降に見られる覗きからくり[(7)]とよく似た構造である。

すなわち、以下のことが考えられる。日本に昼景と夜景を見せる覗きからくりが渡来し、巷間に出現する以前の覗きからくりは、奥行きのある空間の中で人形などを動かしたり、何か話題のものを描いて見せたりする装置だったのではないか。

4.「覗きからくり」という名称の出現

さて、覗きからくりの「カラクリ」について考えるために、その呼称がどのように現れるのか知ることにする。表１に、覗きからくりが書（描）かれている資料とその呼称について1770年を目途に整理した。

覗きからくりが日本の見世物文化中に登場するその始まりの時期には、飴売りが持つ覗きからくりとして描かれる。英一蝶（1652年生～1724年没）は覗きからくりを描き、「糖うり（あめうり）」「あめ売」として詞書きを付している。また、1693（元禄６）年上演[(8)]の近松門左衛門『ひら仮名太平記』には飴売りが持つ覗きからくりが書かれ、中が空洞になっていることがわかる。そこには「からくりのぞきの箱」、「からくりの箱」、「からくり」とある。

『ひら仮名太平記』に先立って、1685（貞享２）年作とされる園果亭義栗画『字尽絵鏡』には「の

ぞき」と詞書きがあるが、飴売りは描かれていない。また、1700年を過ぎて、1709（宝永6）年『遊君女郎花』には呼称の記述はなく、図像中の看板に「大阪下り　竹田　からくり」とある。そして、1711（正徳元）年近松門左衛門『冥土の飛脚』に至って初めて「覗きからくり」の呼称が登場する。

以上のことから、1600年代後半に覗きからくりは日本文化の中に現れ、飴売りが持ち歩いたが、その装置にはっきりした呼称はなく、1700年を前後する時期に呼称が定着したことがわかる。

覗きからくりの呼称は「からくり」を「覗く」ことから始まっている。すなわち、「からくり」を「のぞく」ものを「ノゾキ」、「カラクリ」、「カラクリノゾキ」と呼び、次第に「ノゾキカラクリ」の呼称が出来たものだろう。そして、その図像資料と「箱」の記述から、箱の中は中空で何らかの「からくり」があり、それを覗かせていたものだということになる。やはり、箱の何らかの仕掛けに「カラクリ」という呼称を与えたということになるだろう。

表1　近世覗きからくりの呼称

西暦	資料名	種類	呼称
1685年（貞享2年）	園果亭義栗畫『字盡繪鏡』	人形を操る	のぞき
1693年（元禄6年）	近松門左衛門 『ひら仮名太平記』	浄瑠璃台本飴売り	①からくりのぞきの箱 ②からくりの箱　③からくり
1698年（元禄11年）	宮川長春『江戸風俗図巻』	飴売り	
1709～1724年 （宝永6年～享保8年）頃	英一蝶「糖うり」	飴売り	糖うり
1709年（宝永6年）	『遊君女郎花』		竹田からくり
1711年（正徳元年）	近松門左衛門『冥土の飛脚』	浄瑠璃台本	覗きからくり
1715年（正徳5年）	『艶道通鑑』		覗きからくり
1718年（享保3年）	『本朝文鑑』	地獄極楽	覗きからくり
1720～21年 （享保5～6年）	『江戸風俗図巻・浅草の図』	人形を覗く	
1730年（享保15年）	『絵本御伽品鏡』	象の看板	大からくり
1746年初版（延享3年初版）	『絵本東わらは』	（千畳敷）	①からくり　②のぞき
1752年（宝暦2年） （奥付寛延5年）	『絵本家賀御伽』	名所絵	のぞき
1751～1764年（宝暦の頃）	猿猴庵『名陽旧覧図志』 （回顧記事）	人形が出入りする	（覗きからくり）
1768年（明和5年）	『明和雑記』	豊竹此吉芝居に 「お染久松」浄瑠璃を出す	覗きからくり
1770年（明和7年）	『辰巳の園』		からくり

5.「カラクリ」という語

(1)「からくり」、「絡繰」、「機関」、「機巧」

前項で箱の何らかの仕掛けに「カラクリ」という呼称を与えたとしたが、その「カラクリ」という語の本来持つ意味は何だろう。カラクリの表記には「からくり」とともに、「絡繰」、「機関」、「機巧」等の漢字表記がある。漢語である「機関」や「機巧」に和語である「からくり」の読みを当てたのだろうが、その意図に興味が引かれる。この語はどのような意味合いを持つのか。「からくり」の表記

がどのような意味内容を持つのかを知ることが、覗きからくりの「カラクリ」を考えるための１つのヒントになるだろう。

先行研究として紹介した山本慶一は、「のぞきからくり」が、竹田からくりを模倣小型化したことで始まったとしていた。つまり、覗きからくりの「からくり」は、竹田からくりの「からくり」だということになる。この当否を検討するためにも、「カラクリ」の語の意味内容を考えてみたい。

現代日本語の語用例を考えてみれば、糸で操ったり、ゼンマイやバネ、水の力を用いて動かす仕掛けを「からくり」と呼び、その用例には、からくり芝居、からくり人形、からくり的がある。また、それらを含んで、内部を巧みに作り、変化をさせることを「からくり」と呼び、からくり花火などと用いる語もある。また、ある事柄がうまく運ぶようにあれこれと考え計略を巡らすことを「からくる」と言い、「あの事件の裏側には〇〇というからくりがある」などと言う。どうやら、「からくり」という語には、具体的な物であろうと思考であろうと、表から見えない内側に何らかの考えを巡らして細工、構成したものを「からくり」と呼ぶという意味がある。

しかしながら、からくり人形の「からくり」や現代語の「からくり」の意味がそのまま「覗きからくり」の「からくり」の意味になっているとは限らない。言葉は変化し成長する。覗きからくりが日本文化に入り込んだ頃の「からくり」の持つ意味を知る必要がある。ついては、「からくり」の語が中世、近世の日本でどのように使われ、説明されているのかを、近世字類抄などを用いて確認を行った。

(2)　字類抄、節用集より

手始めに、室町時代から近世にかけて編纂された字類抄および節用集を見てみた。まず見たのは、平安時代末期に成立した古辞書『色葉字類抄』[9]であるが、当該語を見出すことはできなかった。

次いで、日常語を漢字で表記するための用字集である節用集を確認した[10]。内容は以下のようである。なお、諸本の成立、写本、刊行年代はそれぞれの影印本に付された解説によるものとした。

これらの節用集を概括すれば、「カラクル」、「カラグル」、「カラゲル」、「カラグ」などの語があり、その語音に対して適当な漢字表記を当てたと思われる。加えて、その漢字表記から、物を結う意の「カラグル」、物を操る意の「カラクル」、お金をやりくりする「カラクル」、人を調整する「カラクル」、言葉を操る「カラクル」、考える「カラクル」があることがわかる。また、和漢通用集に「差縄（さしなわ）　物をからぐる」と

文明本節用集（成立は室町時代中期、一六世紀初頭か）〔三一一　一五八頁〕
〇 慥（カラクル）―レ舟　〇 拷（カラクル）　〇 絡（同）

正宗文庫本節用集（室町期に属する写本）〔二一一丁オ〕
方便（カラクル）物　絡（カラクリ）人ヲ

和漢通用集（成立は慶長より元和、寛永頃）〔一五八・一五九　八五頁〕〔三五二　一九二頁〕
考（カラクル）うちわを――（筆者注「うちわ」は内輪か）
検（からくる）物を結也　拷（同）　同　絡（同）　同
差縄（さしなわ）物をからぐる

黒本本節用集（書写年代　応仁文明～享禄天文頃）〔六五丁　二二二頁〕
考（カラクル）
検（カラクル）　拷（同）　絡（同）

天正一七年本節用集＊（天正一七（一五八九）年）〔四二丁オ　三〇七頁〕
拷（カラクル）　絡（カラグル）―荷

伊京集（中世末期の筆写本）〔一一五丁　三四頁〕
拼（カラグレ）尻

饅頭屋本節用集（成立は室町末期）〔五六丁　一三八頁〕
絡（カラクル）拷（同）

あることから、物をカラグルためには縄や糸を縒ったものが用いられたことがわかる。

「カラクル」、「カラゲル」などの語は室町期には存在し、覗きからくりが日本の見世物文化に登場する以前からあったことになる。物を考え、縄や糸を操ることに用いていたといえる。

(3) 羅葡日対訳辞書、日葡辞書、ロドリゲス日本文典

節用集より漢字表記と日本語としての用い方を知ることができたが、その意味内容が今ひとつ具体的ではない。「カラクル」、「カラクリ」の音の意味は、日本語やポルトガル語を学び翻訳するための辞書である、羅葡日対訳辞書、日葡辞書、ロドリゲス日本文典により知ることができる。以下に示す。

天草版『羅葡日対訳辞書』[11]（1595（文禄 4）年）〔p106, p420, p436〕

Catádronus daimotuo fague, aruiua aguru tame ni caracuritaru doguno na.（ダイモツヲ　サゲ、アルイワ　アグル　タメニ　カラクリタル　ドウグノ　ナ）

Libramentum ixibiya nadouo caracurite atcuco dogu.（イシビヤ　ナドヲ　カラクリテ　アツカウ　ドウグ）

Machinosus, a, um. caracutte, tcucuritaru coto.（カラクッテ　ツクリタル　コト）

『日葡辞書』[12]（1603（慶長 8）年）〔p100〕

caracuri, u, utta　カラクリ、ル、ッタ（絡繰り、る、った）　何か巧妙な物を作り出す、または、工夫し発明する。また、ある人とほかの人とが和合して一体になるように工夫をめぐらし、仲を調整する。例、Vchiuauo caracuru.（内輪を絡繰る）ほかの人々が同じ意見になるように上のような工夫をし、策をめぐらす。

『日本文典』[13]（1602（慶長 9）～1608（慶長 13）年刊）〔『日本大文典』p803〕

Gozǒ（五臓）。即ち、……Gozǒ roppuno caracuri（五臓六腑のからくり）Roppu（六腑）を見よ。

『羅葡日対訳辞書』の「カラクリタル　ドウグノ　ナ（からくりたる道具の名）」、「カラクリテ　アツカウ　ドウグ（からくりて扱う道具）」、「カラクッテ　ツクリタル　コト（からくって作りたること）」から、「からくる」とは、工夫して仕掛けや機巧を考えることだとわかる。『日葡辞書』にある「何か巧妙な物を作り出す、または、工夫し発明する。」という記述はそのままに『羅葡日対訳辞書』の内容と同じである。面白いことは、『日葡辞書』にある「内輪をからくる」という用例であり、「人間関係を工夫し、策をめぐらす」意味が、『正宗文庫本節用集』にあった「絡（カラクリ）人ヲ」、「方便（カラクル）」の説明と重なることである。

1600 年を前後する時期において「カラクル」には、ものや戦う道具に工夫して巧妙な仕掛けをすることの意味、巧妙な仕掛けを考え作るという意味、人間関係を工夫するための策を考えるという意味があったことになる。

(4)「からくり」という語

まとめれば、日本語における「からくる」、「からくり」の語の用例は、鎌倉時代に遡り、覗きからくりが登場する以前から存在していた。すなわち、各種の節用集では、物を結うことや物を操ること、お金をやりくりすること、人を調整すること、言葉を操ること、考えることに「カラクル」が用いられていた。また、ポルトガル語と日本語間の辞書では、「カラクル」には、巧妙な仕掛けを持つ道具や戦う道具、巧妙な仕掛けを考え作ること、仕掛けそのものをさす意味があった。また、それには人間関係がうまくいくために調整することという意味もあった。

語彙の持つ意味内容は必要に応じて変化をしていくものであるが、1300〜1600年頃にかけては、そう意味内容が変化をしていないようである。巧妙な仕掛けを考え工夫することを「からくる」とし、その仕掛けをした装置そのものを「からくり」としている。覗きからくりの「からくり」の語を考える上において、その発生当時の「からくり」の語の意味が覗きからくりのイメージに当てはまり、名称に採用されたと推測すれば、仕掛けられた工夫、ないしは物を操る、物を結うことを「からくり」と呼んだといえる。注意すべきは、箱の存在、または裏側や内を隠すことを意識して用いてはいないことだろう。つまり、人が工夫し考え、うまくいくことを意識した言葉だということになる。

覗きからくりが登場する以前から「からくる」、「からくり」の語は存在し、生活の中で用いられていた。人間が巧妙に工夫し考えたものを「からくり」として名を呼んだということになる。つまり、人間が巧妙に工夫し考えた仕掛けがあることを「覗きからくり」の「からくり」は示している。長崎に渡来した箱の中を覗き込む装置は、どこかで誰かによって箱の中に人間が巧妙に工夫し考えた「からくり」が入れられ、それを覗かせたから「覗きからくり」なのだということになろう。

以上のことから、覗きからくりの「からくり」は、竹田からくりの「からくり」だと言い切れないことになる。しかし、「竹田からくり」の「カラクリ」は人間が巧妙に考えた仕掛けである。山本慶一の「のぞきからくり」が竹田からくりを模倣小型化したことで始まったという主張を踏まえて、再検討を加えてみたい。

6. 近世の人形からくり

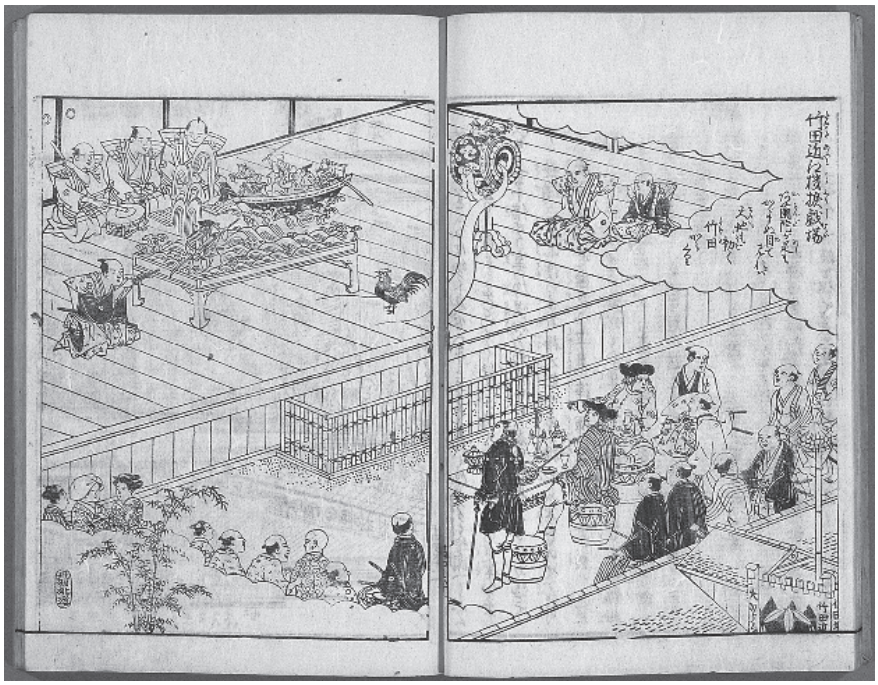
(1) 竹田からくり

人間が巧妙に工夫し考えたものを「からくり」として名を呼び、「覗きからくり」の「からくり」は箱の中の人間が巧妙に工夫し考えた「からくり」を覗かせたから「覗きからくり」となったのだろうと述べた。覗きからくりの「からくり」は、竹田からくりの「からくり」と同じだとはいえないが、看板に「竹田からくり」を掲げる以上、覗きからくりはどこかで竹田からくりの「からくり」と関与したと思われる。とりあえずは、竹田からくりについて概観することにしたい。

竹田からくりは、ゼンマイやバネを利用したからくりで、大がかりに屋台や道具類を動かして見せた[(14)]。1762（宝暦12）年出版の『歌舞伎事始[(15)]』によれば、「からくり物真似子供狂言　竹田近江」は1658（万治元）年に口宣を頂戴し竹田出雲掾と名乗り、1662（寛文2）年に大坂でからくりを始めたという。1726（享保11）年に名を改め竹田近江となった。その竹田近江は1729（享保14）年に病死、悴の三四郎に引き継ぎ近江清英を名乗った。その後は、1743（寛保3）年に弟平助が近江を名乗

るようになったという。

その人気ぶりを加藤曳尾庵が『我衣』[16]の1741（寛保元）年記事に大坂竹田近江が堺町勘三郎芝居の向かいで「からくり幷子供狂言」を見せたときの様子を書いているが、それは「右貴賤老若群衆す。初日より三日の間だあまり人多き故、木戸を閉て不入。」というほどだった。また、1798（寛政10）年の秋里籬島『摂津名所図会』[17]巻四の「竹田近江が機捩戯場（からくりしばい）」でも知ることができる。「竹田近江が機捩戯場は、諸国までも聞こえて其名高し。」、「此芝居世に高く、東西辺鄙の旅人も、竹田唐繰を見ねば大坂へ来りし験なしとぞ聞えし。」とある。その評判は大坂のみならず、大坂に出てきたら竹田芝居を見ずには帰れないといわれたほどであったという。図7は、秋里籬島が描く、オランダ人が竹田からくりを見物する光景である。この図から、竹田からくりは、舞台の上で太鼓や大夫の語る節に合わせてからくり仕掛けの作り物を見せていたことがわかる。



竹田近江機捩戯場（たけだおうみからくりしばい）
阿蘭陀が足もかがまぬ
目で見れば　天地も動く
竹田からくり

図7　秋里籬島『摂津名所図会』巻四　1798（寛政10）年　国会図書館蔵

その竹田からくりの作り物については、『機関千種の実生』[18]で知ることができる。この版本は、葺屋町での興行にあたっての興行案内で出される演目と時間、その説明を書いたものである。その序に、

元祖竹田近江より御当地にて再三興行仕る所御贔屓を以て繁昌仕難有奉存候先祖竹田近江義ハ縫之介と申御当地の産にて浅草観世音御霊管ニよつて砂土計と申儀工夫仕始メ則懐胎十月の図と申細工をからくりの根元となし百余年があいだ種々いたし来り候得共ことごとく其品を顕しかたく有増外題を以て奉御覧ニ入候尤大祖父ゟ致し来りの細工不残私譲り請候得共若年の儀不調法の所ハ御了簡被成下候様偏ニ奉頼上候尤此度ふきや町辰松芝居においてからくり諸芸興行仕候あいだ先年ニ不相替御ひゐき厚く御見物御出のほと奉希候以上　　細工人竹田縫之介

とある。刊年不明だが、竹田縫之介[19]と名乗り、初代から百余年ということから、この興行は1780年前後のものであろう。竹田近江のからくりが砂時計から始まったこと、懐胎十月が評判を取ったこと、竹田縫之介が大祖父のからくりの品々を受けついだこと、今度葺屋町辰松芝居で興行をすることになったことなどが書かれている。興行に供された演目は、「おどり馬洗伊達染手綱」、「大からくり三筆松梅桜」、「おどり恋慕流慈歌口」、「大からくり邯鄲栄花春」、「子供狂言生如来餅撞縁起」等々だった。

その魅力を喜田川守貞が、「竹田座、是モ近来カブキヲ専トスレドモ、カラクリ也。発起人ハ、操人形ノ細工人ニテ、〈…　略　…〉寛文二年道頓ボリニ、機関芝居ヲ興行シ、竹田近江掾ト再任シ、木偶自ラ種々ノ働キヲ為ス等、不可思議ノ巧ヲナセシコト、今ニ至リ、人口ニ云伝フ[20]。」と書く。すなわち木偶が独りで不思議な種々の動きをすることに魅力があったということになる。竹田からくりの魅力は人形の動きの不思議さにあった。

ただし、一世を風靡した竹田からくりではあったがその後はだんだんに人気に影が差していったようである。その後の竹田からくりについて立川昭二は、「竹田家は三代近江の没後、弟平助があとを継ぎ、竹田・竹本・出羽・中の芝居を掌中におさめた。しかし人心はようやく機巧から離れていく。機械的な技巧より本当の人間の芸を見たいという欲求にかわり、歌舞伎に人気が集中し、からくり芝居の座運は急速に傾斜していく」とし、1768年を過ぎてその人気は段々に衰え、1772年以降は興行界の第一線から消えていった〔立川昭二　1969年[21]、p177〕とする。そうではあるが、『我衣』(1741年)、秋里籬島『摂津名所図会』巻四の1798年条に竹田からくり芝居の人気の様子が窺え、更に下って『武江年表』1866（慶応2）年正月条に、「〇正月より浅草奥山見せ物、秋山平十郎活人形、竹田縫之助ゼンマイからくり等なり[22]」とあることから、それなりに竹田からくりは続いていたものと思われる。前田勇によれば、竹田の芝居は1868（明治初）年に歌舞伎劇場に転じ、1876（明治9）年に焼亡、弁天座となったとある[23]。

(2)　竹田からくり芝居

前述したように、喜田川守貞は「竹田座、是モ近来カブキヲ専トスレドモ、カラクリ也。発起人ハ、操人形ノ細工人ニテ、……」と述べている。歌舞伎を専ら見せていたというのだが、どのように演じていたのだろうか。秋里籬島が『摂津名所図会』に描く『竹田近江機捩戯場（からくりしばい）』の絡繰り装置から想像すれば、歌舞伎役者を擬した人形が動いて見せるということになろうが、芝居小屋なみの大きさを持っていたとなるとその規模がよくわからない。参考のために現代に伝わる竹田からくり芝居を確認し、どのようなものなのか具体的イメージを持つことにしたい。

群馬県桐生市「桐生からくり人形芝居保存会」と鹿児島県知覧町「知覧水車からくり保存会」にからくり人形を用いたからくり芝居が保存・伝承されている。ただし、両者とも昔のままではない。毎年毎年工夫を重ね保存伝承が行われているため、18〜19世紀のものがそのまま見られるというわけではない。

(a)　群馬県桐生市「桐生からくり人形」

桐生からくり人形は、かつて桐生天満宮の「餝物（飾り物）」として各町内から出され、近世竹田

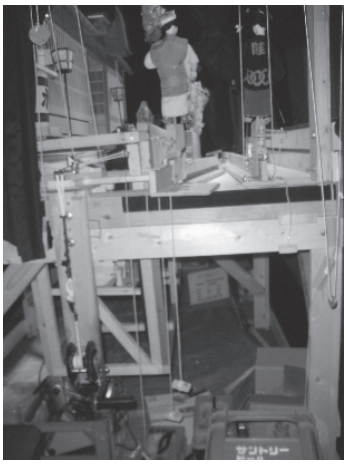
からくり芝居を継承しているという[24]。以下、『図録桐生からくり芝居』の記述を参考にまとめた。桐生天満宮のご開帳は1762（宝暦12）年に始まり、不定期に行われてきた。しかし、からくり芝居が始まった時期は定かではなく、1834（天保5）年に「文覚上人那智の滝の荒行の場」や「天人美保の松原に遊ぶ処」などが出されたとされる記録、1841（天保12）年の御開帳記録から、その頃すでに行われていたと思われる。1852（嘉永5）年に「からくり飾り物」が各町内から出された記録がある[25]。

明治27年、明治35年、大正5年、昭和3年、昭和27年、昭和36年の引き札が有鄰館（桐生からくり人形芝居館）に保存展示されている。それらによって往時、からくり人形を各町内が出し、関東一円に引き札を配り、盛大に行っていたことがわかる。

また、桐生では1916（大正5）年までは水車を動力としてからくり人形を動かしていたといい、水車からくりとも呼ばれ、天満宮神社の水路に水車が展示されている。それ以降はモーターが使用されるようになった。

1961（昭和36）年以降途絶えていたが、1997（平成9）年に保存会が結成され、各町内に残っていた人形や資料からからくり芝居が復元、上演されている。現在、復活上演される演目は5つ、「曽我

舞台



舞台袖

紐を引く

桐生天満宮　水車

図8　桐生からくり人形芝居『助六由縁江戸桜』（2012年撮影）

兄弟夜討ち」、「巌流島」、「義士討ち入り」、「助六由縁江戸桜」、「弁慶五条橋」である。いずれも有名な歌舞伎の演目である。人形はかつて使っていたもののレプリカを作成し、仕掛けは以前よりも改良、工夫して、丈夫に緻密に作ってあるという。

舞台は、歌舞伎舞台を模倣して作られている。その床面や裏面に各種の歯車、ベルトやチェーン、紐、大小滑車、各種プーリー、各種カム、バネ、ゴムなどを仕掛けて、人形や舞台装置が動くようになっている。一体一体の頭、手、足が動き、それぞれの所作をする。また位置を変えたり、回転したりする。

さて、『助六由縁江戸桜』（図8）は一幕三場で構成され、有名な名場面を見せるようになっている。第二場では花魁揚巻がのれんをくぐって登場し、反転して帰って行き、第三場では助六がせり上がって登場し、傘を開いて見得を切る。舞台袖では、操作担当者が紐を引いて人形や仕掛けの動きの操作をしている。段替わりを含めてすべてからくり仕掛けで動いているのだが、うまく作ってある。定式幕が開くと、長唄や台詞が流れ、見ていて楽しいと共に、その仕掛けの巧妙さに驚いてしまう。

桐生のからくり人形芝居は、歌舞伎舞台のごとく設え、段替わりをし、精巧に作られた人形や舞台装置をからくり仕掛けで動かし、歌舞伎名場面を見せてくれる。「機関（からくり）」、「機巧（からくり）」の意味がよくわかる。

(b) 鹿児島県薩南地方の水車からくり

鹿児島県薩南地方に水車を動力源に用いた水からくりが継承されている。南九州市知覧町豊玉姫神社、南さつま市加世田竹田神社、日置市吹上町湯之元である。薩南地方にはこの他に10種の水車からくりがあったが、現在は廃れている。[26]

この内、加世田竹田神社、吹上町湯之元のものは、水車の真上に水路をまたぐように舞台を設置し、その中央で人形の乗せられた円形の回転台が回り、人形が動く仕掛けになっている。人形の手足などは動かない。

加世田の竹田神社の水車からくり（図9）は神社の夏祭りに行われる。水車からくり保存会の鮫島会長の話によれば、人形は等身大に作られ、毎年何を出そうかと演目を相談し、人形を制作するという。この水からくり人形の仕掛けそのものは江戸時代のものをそのままに引き継いでいる。

一方、知覧町豊玉姫神社では7月9日からの「六月灯」の行事に行われる。この行事は江戸時代に始まったとされるが、長期間中断され1979（昭和54）年に復活された。神社脇の用水路に赤い水車が掛けられ、神社境内入口の「水からくりやかた」で演じられる。毎年出し物は替わり、歌舞伎や昔話の名場面が作ら

図9　加世田竹田神社の水車からくり「加世田別府城攻め」（2012年撮影）

れる。2010年は「かぐや姫」、2012年は「牛若丸と弁慶」（図10）だった。「牛若丸と弁慶」の場合、舞台中央に作られた五条の橋の上を牛若丸がひらりひらりと左右に飛ぶ高度な仕掛けになっている。弁慶は長刀を振り回し、向きを変える。他の武者人形は弓を引く動作や、刀を上下する動きをする。ただし、大きく動くのは主人公となる人形だけで、他の人形は前後または左右に動くのみである。

舞台の下には、水車の動きを人形に伝える様々な仕掛けがある。何本もの木製シーソーや大小の歯車、カムなどがベルトや紐、ワイヤーでつながっている。神社にはからくり人形専用の工房があり、保存会の人々が毎年工夫を重ね、新たな仕掛けを考えているということだ。知覧町の博物館には古い人形や仕掛けが保存されているが、それらの中に板ベルトがある。ベルトコンベヤーの板製版である。からくりを考える上で非常に興味深い。

舞台

舞台下のからくり装置

舞台裏水車

図10　知覧水車からくり「牛若丸と弁慶」（2012年撮影）

(3) 近世の人形からくり

(a) からくり＝竹田からくりへの疑問

ここまで、近世竹田からくりの図像資料とその流れを汲むという現代のからくり人形芝居を見てきた。17～18 世紀のからくり人形のイメージを持つことができたのではないか。加世田の竹田神社の水車からくりが江戸時代そのままの機巧であるということから、近世には水車の縦回転を水平回転に変え、テーブル上の回る人形を見せるからくりや、桐生のからくり人形芝居のような歌舞伎もどきの舞台の中で複雑な人形の動きを作り出し、芝居仕立てにするものがあったということである。

さて、覗きからくりがこのような「竹田からくり（芝居）」を取り込んだといえるのだろうか。つまり、近世の人形からくりは竹田だけではない。玉屋庄兵衛などのからくり人形師の活躍した時代ではなかったか。からくり＝竹田からくり、竹田からくりの看板＝竹田からくりを見せていると考えてよいものだろうか。表 1 に立ち返れば、この表は 1770 年までの呼称をまとめたものだが、1709 年『遊君女郎花』に「竹田からくり」の呼称が、1730 年『絵本御伽品鏡』に「大からくり」の呼称があるだけである。あまり「竹田からくり」の呼称は出てこない。一方、その頃に竹田近江は全盛期を迎えている。この時期、近松門左衛門が覗きからくりをその作品中に書くようになっていることから、「のぞきからくり」、「のぞき」、「からくり」の呼称は存在していた。もう少し検討が必要なようである。

(b) 山崎構成の竹田機関座に関する検討

山崎構成は、その大著『曳山の人形戯[27]』〔1981 年〕で、曳山の上で人形を演技させる奉納人形戯について検討をしている。その中の第七章「からくり考」で、「からくり」の解釈について疑問を提示し、以下のように間接的に批判をしている。

> 挺子を縦横無尽に物理的に応用すること、無数の滑車と糸車とひき綱、原動力は人力、加えて錬磨した技倆で人形は見事にうごく。それを「からくり」と唱えたり「竹田からくり」と呼んでいる。「竹田からくり」の伝承を肯定する側に立てば、「からくり」ではなく「竹田からくり」と呼ぶことは可能であろうが「からくり」と称することが果たして正しいと言えるのかと科学者は反論するかもしれない。〔山崎 1981，p853、854〕

「からくり」＝「竹田からくり」とすることは語彙的、科学的に正しくはなく、「竹田からくり」という呼称が一人歩きした可能性があるというのである。

その上で山崎は、1700 年頃の時計師や自動ぜんまい人形を作るからくり細工師が、竹田近江だけではなく、複数いたことを指摘している。その名前だけを少し拾い出しても、おやま五郎兵衛、山本弥三五郎（山本飛驒掾源清賢）、名古屋の津田助左ヱ門、京都の平山武蔵、法橋元佐、三宅勝次、江戸の広田理右衛門、小林伝次郎、近江守元住、田中市右ヱ門、藤原正次、弘前九戸藤吉、長崎の幸野吉郎左衛門、御幡栄三、藤原紀理、天保期の田中久重（からくり儀右衛門）、水戸の宮田治郎左ヱ門、人見辰五郎など〔同　p854～864〕の名がある。時代を前後しつつも、多くのぜんまいや歯車を扱う時計師、からくり細工師がいたということである。しかし、「〇〇からくり」と呼ばれるのは

「竹田からくり」のみである。作ったからくりを見世物にした人物もいたはずで、「竹田」のみが「からくり」を冠するのは違和感がある。

山崎は「竹田からくり」の呼称が「からくり」という語の別称のごとく扱われ、曳山の関係者や興行師たちがそれぞれの思惑で「竹田からくり」を付与したと考えているようである。

また、第八章「竹田機関座と曳山機巧戯」の書き出し部分に、曳山機巧戯は愛知県下に7割が集中し、そのうち単独に動く人形総数412件のうち、89件が「からくり」を自称するという。加えて、その半数の地区の古老が（自分たちのものが）竹田からくりだと自賛している〔同　p881〕と書く。すなわち、竹田からくり人形はぜんまい仕掛けで、曳山人形にぜんまい仕掛け人形はないにもかかわらず竹田からくりを自称しているというのである。山崎は、「この事実は全くない」〔同　p854〕のであり、おかしいという。その上で、竹田機関座と曳山機巧戯の関連付けを検討し、結論を以下のように書く。

> 竹田機巧座とどの様に曳山に関連づけるかという課題について、糸口をつかむことは容易でないことがわかる。その理由は竹田機巧座にコッピーライトが存在しないことであり、自由な創造的発想をねらっている竹田機巧座の実態は多くの模倣者の発生を余儀なくしていることである。従って竹田の興行が極端に少ないことは曳山機巧に参与したためかもしれない。〔同　p923〕

山崎は竹田からくりの模倣者が多くいたことを指摘している。コピーライト（著作権）がなく、新しいからくり仕掛けを次々と考え、奇をてらう発想が人々に受けていたことを考えれば当然なのかも知れない。

ここまでをまとめれば、多くの時計師やからくり細工師が同時代に存在し、多くの模倣者が存在し、それらの関係者が自分たちのものを「竹田からくり」と名乗ったということになる。

覗きからくりの場合、「竹田からくり」、「大からくり」の看板を持つことから、どこかで「竹田からくり」ないしは「竹田からくり」擬きを取り込んだことは間違いがないと思われるが、竹田からくりではないカラクリを仕込んでいたことも考えられる。また、竹田からくりの模倣者の1人が覗きからくりであったのかも知れない。からくり＝竹田からくりとして竹田からくり芝居から離れて看板に定着した可能性もある。すなわち、覗きからくりの「からくり」は「竹田からくり」ではないのかも知れない。

7. 覗きからくりと竹田からくり

(1)　覗きからくりと竹田からくり

西欧に残る「覗きからくり」装置、「からくり」という語、現代に伝承されている竹田からくり（芝居）を確認し、覗きからくりの「からくり」を「竹田からくり」と理解することに疑義があることがわかった。それを受けて、竹田からくりと覗きからくりの関わりについて考えていきたい。

関連の確認のために、表2「覗きからくりと竹田からくり」を作成した。覗きからくり図像資料、実物資料のうち「竹田からくり」または「大からくり」の看板を持つ資料と竹田からくりの隆盛状況

を対比して見るようにした。ただし、表2を見る上で、「竹田からくり」、「大からくり」の看板を持たないものは表2中に盛り込まれないことは注意してほしい。つまり、1709（宝永6）年『遊君女郎花』以前にも覗きからくりは存在したが、「からくり」の文字がないために表にはあがっていない。

表2 「覗きからくりと竹田からくり」

年	「竹田からくり」「大からくり」の名称・看板を持つ資料	関連記事
	※これ以前の資料には「からくり」の名称は付されてない。	
1662年		竹田近江、からくり芝居を始める
1693年上演		近松門左衛門『ひら仮名太平記』「からくりのぞきの箱に」「からくりの箱」「私がからくりは」
1709年	『遊君女郎花』 看板に「大坂下り　竹田からくり」	
1711年初演		近松門左衛門『冥土の飛脚』 「覘（のぞき）の機関（からくり）飴賣と」
1715年		『艶道通鑑』「覗きからくりをびいどろなしに。 大津繪を生でみるけしき」
1718年		『本朝文鑑』「地黄煎ノ解」 「覗きからくりのあしらひと思ひ」
1724年		初代竹田近江病死
1730年	『絵本御伽品鏡』 看板には「大からくり」	
1741年		『我衣』 「（大坂竹田近江）人多き故、木戸を閉て不入」
1768年		竹田近江、大掾の名を他家に譲る
1772年		竹本座、解体
1774年		『浮世くらべ』 名所絵を見せる「のぞき」と人形を動かしてみせる「のぞき」の言い立ての両方が記載されている
1772〜1781年	『東叡麓八景』 看板には「大からくり細工人竹田」「オランダ操」	
1772〜1789年	「のぞきからくり　豊春・正美絵付」（実物資料） 看板には「竹田大からくり」	
1782年	『新版手前勝手御存商売物』 看板には「おらんだ」「大からくり」	
1796年	『人心鏡写絵』 看板字は「からくり」	
1798年		『摂津名所図会』 「竹田唐繰を見ねば大坂へ來りし驗なしとぞ聞えし」
1801〜1803年	刷り物アルバム『華乃光』 看板には「竹田大からくり」	
1807年	『きゝのまにまに』 「堀田大からくり」（からくりの言立て資料）	
1811年		『浮世床』「おらんだの出張」「目鏡は紅毛十里見」
1846年	『絵本柳樽』 看板には「竹田からくり」	
1851〜1914年	『晴風翁物賣物貰盡』 看板には「大からくり」	『晴風翁物賣物貰盡』 段もの風に設えて画を見せる覗きからくりと、人形を動かす覗きからくりの両方が記載されている

表1、表2から、1662年に竹田近江がからくり芝居を始めてから「のぞき」が資料上に現れ1685年園果亭義栗畫『字盡繪鏡』、1693年近松門左衛門『ひら仮名太平記』、1709年『遊君女郎花』に「竹田からくり」の看板が掲げられることがわかる。その後は1730年『絵本御伽品鏡』に「大からくり」があり、1770年代以降の図像資料のほとんどに「竹田からくり」、「大からくり」の看板が描かれている。また、1772年以降、竹田座は衰退するが、衰退してもなお覗きからくりにその名は残っている。

以上の事柄に、「竹田からくり」が「からくり」を表す呼称として一人歩きをしていた可能性を加えて考えてみると2つの問題点が浮かぶ。1つには、初期の飴売りなどが持っていたような看板がないものを含め、1770年代以前の箱の中の「からくり」があったかどうかという問題である。2つには、1772年を過ぎて竹田からくりが下火になっても覗きからくりは竹田からくりを見せ続けていたのかという問題である。もっとも、竹田からくりは一時期ほどの流行ではないにしろ、明治時代まで続くのだから、覗きからくりが竹田からくりを見せていたとすることは不可能ではない。

(2) からくらない覗く箱と紐を引く男たち

1つ目の問題、夜景を見せる覗きからくりが登場する1770年代以前の箱の中にはどのような「からくり」が仕込まれていたのかという問題についてである。この問題を考えるためには図像資料が役に立つ。詳細は、拙稿「近世覗きからくりは何を見せたか、その1――カラクリを覗く――」年報『非文字資料研究』第8号[28]に記述した。そちらを参照して欲しい。

簡単に述べておけば、覗きからくりの図像資料は3種類に分けることができる。箱を覗くための覗き穴があるだけで操作をするための紐がないもの、覗き箱の側面や背面の様々な位置から紐が出ているもの、覗き箱の側面上方から6〜10本程度の紐が等間隔に同じ高さに並んで出ているものである。覗き箱の内容と箱の中の構造と併せて考えた場合、絵を繰り替える装置は、箱の奥の方に絵があるため、覗き箱から絵の数だけの紐が平行に小間隔に出ている。それに対して、紐が箱側面や後面のアトランダムな位置に出ているものは、箱の中の造作物、人形や舞台小道具、場面などを動かし

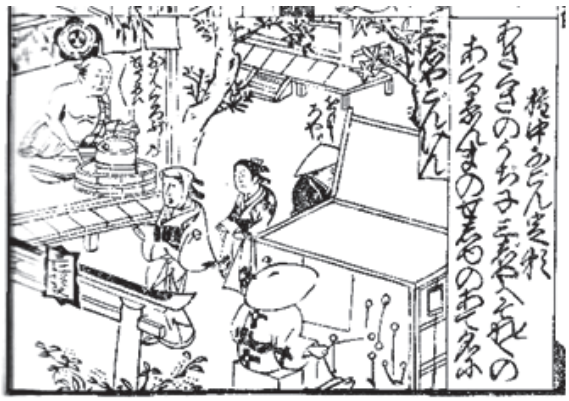
図11　宮川長春『江戸風俗図巻』第二巻　1698（元禄11）年（部分）

図12　『遊君女郎花』1709（宝永6）年（部分）「大坂下り」「竹田からくり」

ていることを示している。紐の出方により箱の内容を推測することができるわけだが、すなわち、第2のタイプが箱の中のカラクリ仕掛けを動かして見せる覗きからくりであり、第3のタイプが名所絵や歌舞伎の名場面などの画を見せる覗きからくりになる。

それでは第一のタイプの覗き穴があるだけの「からくらない覗く箱」は何を見せたか。図11宮川長春『江戸風俗図巻』[29]の挿画では、飴屋は人形を操っている。覗いている人は何を見ているのだろう。竹田からくりの看板もなく、大からくりの看板もない。そして、覗いている人がいるにもかかわらず、見せる側の人間は箱を操ってはいない。覗けば何かが見えるのだろうが、箱の内容を操作するものではないと思われる。すなわち、箱の中にはからくった、つまり工夫をされた工作物か、絵が見え、穴を覗いて錯視を楽しむ装置だったと考えられる。特に操作をするものがはいっていたわけではないということになる。

図13 『江戸風俗図巻　浅草の図』 1720〜21（享保5〜6）年（部分）



三じやごんげん　権中なごん定頼　あさくさのうぢ子三じやへそれぞれの　あくるゑんまのせしゆのあて名に

図14　近藤清春画『江戸名所百人一首』 享保頃 （部分）

飴屋の持つ初期覗きからくり箱は「からくらない箱」だったが、その後「竹田からくり」、「大からくり」の文字が看板に書かれるようになってからは、箱の横や背面に座り込んで何やらからくる男たちが描かれる。図12『遊君女郎花』[30]、図13『江戸風俗図巻　浅草の図』[31]、図14近藤清春『江戸名所百人一首』[32]のごとくである。

図13『江戸風俗図巻　浅草の図』に着目すれば、この覗きからくりの箱の側面からは多くの紐が引き出されており、またその台上には回転木馬風のオランダ人騎馬人形が飾られている。この図像から、大がかりな覗き箱の横から紐を操る仕掛けが箱の中にあることがわかる。

図14近藤清春画『江戸名所百人一首』（享保頃）に覗きからくりが描かれているが、図像の紐位置をよく見れば、紐の高さはまちまち、取り付け幅もまちまちである。紐の位置や取り付け幅が揃わないということは、絵を繰り替えて見せているのではなく、何らかの作り物を動かしていたのだということになる。

それでは何を見せていたかということになるが、それぞれの看板絵から推し量るに、客寄せである看板絵の題材にし、関連した何らかの作り物や人形を動かして見せていたと思われる。複雑さがどこまで進展していたのかは定かではない。

(3) 夜景を見せるカラクリの登場

それでは2つ目の問題、竹田からくりが下火になってからも覗きからくりは竹田からくりを見せ続けていたのかという問題を検討する。1770年を過ぎて夜景を見せる覗きからくりが現れて以降、竹田からくりが下火になってからも、竹田からくりないしはそれを模倣したものを見せ続けていたのだろうか。表3に覗きからくり資料中から見出せる覗きからくりの変化点を拾い出し整理をした。

表2、表3から、1700年代半ばに遠近法画法を示す「浮絵」技術が日本に持ち込まれ、台上に彩色付き銅版画をおいて見る反射式覗き眼鏡が持ち込まれたこと、1770年代に遠近描画法で描かれた昼景と夜景を見せる覗きからくり装置が登場し、それらが「オランダ」「オランダ操」「オランダ眼鏡」と呼ばれたことがわかる。

この時点で招き看板や袖看板を持っているのだが、さらに1800年代に入って覗きからくり装置の外形の装飾化が進み、屋根が付き、下がり看板が付与され芝居小屋化が進んでいったことがわかる。

そうではあるが、覗きからくりが内容的に、外形的に変化をしても、「オランダ〇〇」の看板がついても、「大からくり」の看板は共に掛けられ、場合によっては「竹田からくり」の看板も同時に掛けられている。どちらかといえば、夜景を見せる装置に変化してから「竹田からくり」の看板を付けるようになっている。すなわち、覗きからくりの箱の内容にかかわらず、レンズを通して箱の中を覗かせる装置には「カラクリ」の呼称が継続的に用いられ、「からくり」に対し、「からくり」＝「竹田からくり」としてその呼称が使い続けられたということである。

表3　覗きからくり資料中の変化を捉える

年代	資料中の変化点
1662年	竹田近江、竹田からくりを始める。
1685年～	覗きからくりが史料に現れる。
1693年	「からくりのぞきの箱」という名称が現れる。
1709年～	「大からくり」、「竹田からくり」が現れる。
1746年～	「浮絵」、「千畳敷」が現れる。
1751年～	鏡を用いた覗き眼鏡が日本にもたらされる。（反射式覗き眼鏡）
1770年代～	招き看板に遠近画法を用いた画が描かれるようになる。
	覗き箱の前面がカーブし、視点を収束するように作られるようになる。
	覗きからくりが、灯を点し、夜の景色を見せる仕掛けを持つようになる。
	「オランダ」「オランダ操」「オランダ眼鏡」が現れる。
1800年～	屋根の付いた台が描かれる。
1840年頃～	屋根から看板がつり下げられる。

またその一方で、表2中に掲げたが、『浮世くらべ』[33]、『晴風翁物賣物貫盡』[34]にあるように、名所絵や芝居の段ものを画で見せる覗きからくりと人形を動かしてみせる覗きからくりが共に市中に存在していた。すなわち、覗きからくりは、1770年代に夜景を見せる装置が登場し見せる「カラクリ」に変異が生じたが、それ以降、覗きからくりは昼景、夜景を見せる装置と、人形カラクリを見せる装置が併存し、「カラクリ」の呼称はそのまま用いられていったのである。

そして、「竹田からくり」は「からくり」と同意に使われていたと考えられる。人形だろうと名所

絵だろうと、からくり仕掛けを箱の中に仕込んでいる限りは「覗きからくり」であり、「竹田からくり」だったのではないか。ゆえに、竹田からくり芝居が下火になっても、その名前は覗きからくりに使われ続けたのだろう。

8. ノゾキとカラクリ

前述したように、『浮世くらべ』、『晴風翁物賣物貰盡』には名所絵や芝居の段ものを画で見せる覗きからくりと、人形を動かしてみせる覗きからくり両者が書（描）かれている。1つの本の中に、別々に書かれている、あるいは描かれているということは、かなりの相違があるということだろう。2種類の「カラクリ」がどのようであったか、また、その後どうなっていったかについて資料を少し詳しく見てみることにする。

(1) 猿猴庵の描く「古風のぞきからくり」と「今様の覗がらくり」

猿猴庵（1756年生〜1831年没）『名陽旧覧図誌』[35]に「古風覗眼鏡」と題した記事がある。そこには、「古風のぞきからくり」と「今様の覗がらくり」の図（図15）がある。猿猴庵は、宝暦（1751〜1764年）の頃に春秋彼岸の賑わいや神祭開帳等の際に見せていた覗きからくりは、今（文化文政期）と違ってそう面白いものではなかったと、2つの覗きからくりを紹介している。その内容は以下のようである。

古風覗眼鏡（こふうのぞきめがね）

宝暦の頃春秋彼岸の賑合或は神祭開帳などに見せし覗がらくりも　今のことき生写（しょうつし）の風景オランダ絵（ゑ）の類ひにハあらず　箱の内に張子（はりこ）の山がた　あるは竹あじろの屋かたなどありて　小き人形一二立（ひとつふたつたて）あり　口上も何のていといふばかりにて弁舌面白くいふ事なし三味せん太鼓にて時のはやりうたを唄ふ　其拍子にて糸を引ば　人形前へ出たり後へ引こんだりするばかりなりし今時の子供はなかなか合点せぬ見ものなりしが　予が幼き頃何より面白き事の様に身侍りし　其後大須門前へ今様の覗がらくり初て来り小屋かけの見せものにせしかば　貴賤目をおどろかし夜のていの一時に火をとぼしなどするこそ實（まこと）不思議もし摩法（まほう）か飯綱（いづな）かなんぞではないかとあきれて居るくらいなりしがそれより追々に其上〜〜が出来て興多き観（みもの）とはなれり　扨江戸にては覗の口上なし今に流行（はやり）うたをうたふ由古風（こふう）を失はさるにや

古風のぞきからくりの図

今のめがね絵とは雲泥の違ひある事をしらしめんと其一二を爰に誌して後に傳ふ

梅がえ

むけんの年の　むめがへの　人形はたらきの　からくりはなく　前へ出たり　あとへすさり　たるばかり

粟津が原

松原の道具立ありて　松の前とうしろに二つの人形　先に出たりあとずさりするのみ

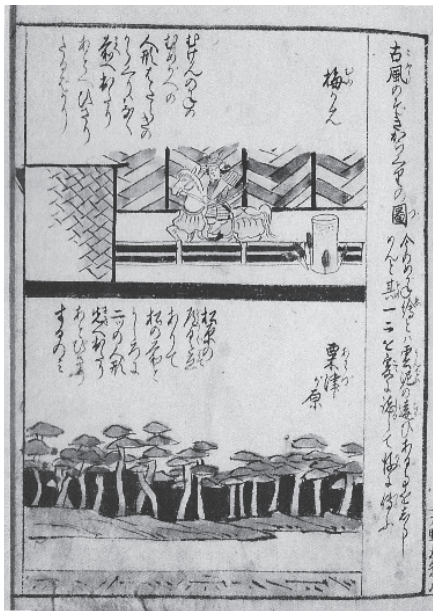


図 15　猿猴庵『名陽旧覧図誌』 1806（文化 3）年～1820（文政 3）年　東洋文庫蔵

「古風覗眼鏡」とする詞書きと共にまとめれば、宝暦の頃の「覗眼鏡」には、箱の内に張子の山形や竹網代の屋かたなどがあり、小さい人形が１つ２つ立ててあった。しかし、「人形のはたらき」がなく、三味線太鼓で時の流行り唄を歌いながらその拍子に合わせて人形が前へ出たり後へ引いたりするばかりだったという。口上も「何のてい」と名所や場面の名前を言うだけで弁舌面白く言い立てを述べる事もなかったという。すなわち、宝暦の頃の覗きからくりは、「梅がえ」、「粟津が原」などと題し、何らかの場面を再現して人形を入れ、前後に動かして見せていたのである。また、人形を動かしてみせる覗きからくりを「覗きからくり」と呼んでいた。

一方、文化文政期になり「今様の覗がらくり」が初めて小屋がけになったので覗いたところ、貴賤の目を驚かしたという。それは、「夜の体」として一時に火を灯して夜景を作り、その不思議さは摩法（魔法）か飯綱（手品）かと驚きあきれるくらいのものだったという。

宝暦の頃の覗きからくりは、人形を紐で動かす仕掛けを持っていた。紐が多ければ多いほど、場面や人形の動きは複雑だったと思われる。簡易なものは、紐で作り物を動かす仕掛けを箱の中に入れ、前後に動かして見せる程度だった。その後、灯を点じ、夜景を見せる覗きからくりが登場し、話題となったことがわかる。

(2)　風落着山人左角齋「のそき」「のぞき」『浮世くらべ』

風落着山人左角齋『浮世くらべ』は、1774（安永 3）年出版のいろいろな言い立てを集めた滑稽本である。その本にも２種類の言い立てが書かれている。１つは「のそき」と題する名所巡りであり、もう１つは「のぞき」と題するお千代半兵衛の人形を動かす言い立てである。同じ作品中に２つの言い立てが別に書かれていることから、絵を見る覗きからくりと、人形を動かして見せる覗きからくりがあったということになる。すなわち、1774 年には絵を見せるものと人形の動きを見せるものが同時に存在した。

のそき

はるかむかふにふさんがゐのみなと千里が竹、此細工にも御め止りますれバ、次キは御当所両国橋夕すゝみの躰を御らんに入ます、遥北の方にあたつて見へますがつくバ山浅草くわんをん五重乃塔、御蔵まへ出張リの松、椎の木屋しき、駒止橋、まつた此方タにミえますハゑかう院の本堂、前ハ淡雪なら茶の見世、向に見ゆるが新大橋、前成はしが両国橋、いがらしの油店、此さいくにも御目がとまりますれバ、夜分のこらず火をてんじ、御覧に入ます、数万のてうちん、あんどうに火のとぼりましたるけしきナントどふで御座ります、扨川中にハ屋根舟やかた打交りてさわぎの躰、仙台河岸には、せんだい陸奥様の御花火、雲にかゝりし大細工、此義も御目に止リますれバ、御名残惜うハ御座りますれど、前まへの御かた様へハ御いとまごい、ナント四文か物は御座りまし（ママ）うがナ、やすいものジヤ

のぞき

三味せんに合セ人形のはたらき、おちよ半兵へが道行じゃ、哥ざいもんうきなの初夢、サアはじまりじゃ、ててんてんてんツンツツンチャンチャン、イヤア哥さいもん〳〵たどり行雨のさしがさ手もたゆく、おち柴の露にそでしぼる、とある屋形にたどり着き、賤の女立出、それゑも能キにいたハり申つゝ、いざこなたへとをく座敷、こよひの雨の淋シさに、それ一ツきよくと染市がひく三味線のはやりうた、きミハ三味せん糸よりやつれておせゝ也。もはや御かまいやるなと我ハ一ト間にてん小ぞう、半兵へおちよを尋いて行バほどなく大山のふもとにこそハ着にけれ、アラゝおそろしやまゝ母はたちまち鬼女とあらわれて、引さきすてんと飛かゝる、三味線と哥に合セ人形の目遣まで、御めをとめられ御らうじませサア始りハまけじゃまけじゃ

「のそき」と題される言い立てから、その「のそき」が江戸の名所を巡り、最後に川面に浮かぶ屋形船や花火を見せるものだったことがわかる。「ふさんがゐの港」→「千里が竹」→「両国橋夕涼みの躰」→「筑波山」→「浅草観音五重乃塔」→「御蔵前出張リの松」→「椎の木屋敷」→「駒止橋」「回向院の本堂」→「淡雪なら茶の見世」→「新大橋」→「両国橋」、→「五十嵐の油店」→「夜分残らず火を点じ」→「川中には屋根舟屋形打交りて騒ぎの躰」、「仙台河岸には、仙台陸奥様の御花火」というように巡っていき、江戸の有名な風景や光景を手近に一巡することができたということだろう。

もう1つ、「お千代半兵衛」の言い立てがある。こちらは人形を動かして見せるものである。「お千代半兵衛」は1722年大坂で八百屋半兵衛とその妻お千代とが心中した巷説を脚色した作品群名である。「三味せんに合セ人形のはたらき、おちよ半兵へが道行じゃ」と始まり、「三味線と哥に合セ人形の目遣まで御めをとめられ御らうじませ。サア始りハまけじゃまけじゃ。」と終わった。三味線に合わせて人形が動き、出たり、引いたり、泣いたり、飛びかかったりする「人形の働き」があることがわかる。加えて、人形の目遣いまでを見ろとあり、大雑把な動きではなく、細かい所作まで演じる細かい絡繰が仕込まれていた。

(3) 清水晴風『晴風翁物賣物貫盡』

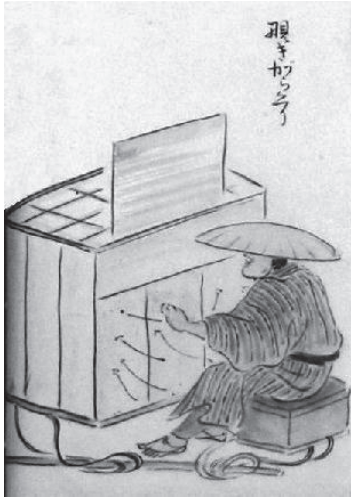
清水晴風（1851年生〜1913年没）による『晴風翁物賣物貫盡』にも、「覗きからくり」2題が描か

れている（図 16）。初めの 1 題は箱の裏から描かれたもので、招き看板や天障子、背負うための紐などが確認できる。箱ごと背負って移動したのだろう。引紐がアトランダムに出ているところから、箱の中では絵を繰り替えているのではなく、人形を動かしているものと思われる。

もう 1 題は、「八百屋お七」を見せる「覗きからくり」である。お白砂の場が描かれている。強遠近画法で芝居の舞台が再現されている。「大からくり」の招き看板が掛けられ、袖看板には、大きくお七と吉三が描かれている。5 個のレンズが取り付けられ、覗き箱の横に男が立つことから、絵を繰り替えて見せる覗きからくりだということがわかる。さて、これらの絵はいつ頃のものを描いたのか。

この『晴風翁物賣物貰盡』の類書に『街の姿』があり、類似の覗きからくりが描かれているが、その解説[36]によれば、天保以降の幕末の風俗を描いたものだとする。つまり、幕末期にも、人形を動かす覗きからくりと、絵を繰り替えて見せる覗きからくりがあったということになる。そしてどちらも

「覗きからくり」



「覗きからくり　八百お七之段」

お寺さんは駒込吉祥寺　茶の湯間座敷の次の間で学文なされし後より膝でよ一寸突て眼で知らしてヤレ私は本郷へ行わいな云々此覗からくりはお七吉三の事跡を始め三荘太夫、小栗判官の話最多し

図 16　清水晴風『晴風翁物賣物貰盡』　東京都立中央図書館　加賀文庫蔵

「覗きからくり」と呼ばれていたことになる。

(4)『グロテスク』に描かれる「からくり」、「のぞき」

最後に、『グロテスク』[37]〔1929（昭和 4）年　文芸市場社〕を見ることにしたい。幕末期まで、人形を見せる装置と夜景を見せる装置が併存し、どちらも似たような名称で呼ばれていたことをここまでで確認してきたが、その後どうなったかを知ることができるからである。当該本は「古今観物、寄席、興業、大博覧会号」であり、「からくり」（図 17-1）、「のぞき」（図 17-2）が挿絵付きで掲載されている。

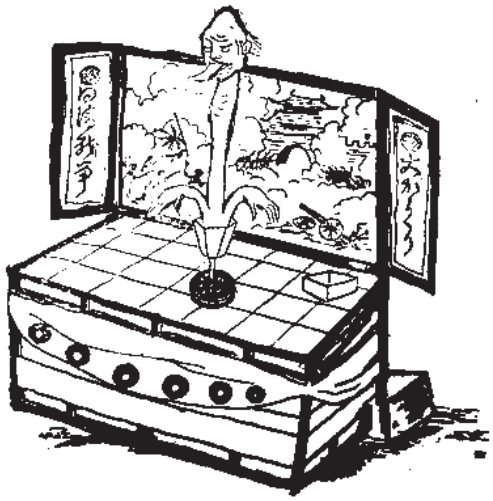
まず、「からくり」である。明治になり、ぜんまい仕掛けの地獄極楽の模様を見せる「からくり」が流行ったという。見世物小舎の内部一面に地獄極楽の気分を出し、その中を赤鬼青鬼、閻魔、亡者等の人形がぜんまいの動きにつれてカンカンと鉦を鳴らしたり、剣の山に追われた亡者が動いたりするものだった。その傍らでは香具師が竹の笞で空箱をぽんぽん叩き、説教師のごとくに説明をしたと

いう。

挿絵には、びっくり人形を乗せたのぞき箱、箱には6つのレンズが付き、袖看板には「大からくり」「日清戦争」とある。招き看板には日章旗を持った兵隊と、その戦いの様子が描かれている。のぞき箱の横に紐が出ていないところから、背面で紐を引いて人形を絡繰っていたのだろう。

次に「のぞき」であるが、「のぞき」も「からくり」も外形はほぼ同じだという。説明節があるというから、何らかの節を付けて歌っていたのだろう。相違点は、レンズを通して中の様子を見ること、中の絵が美しく、画面全体が三段返し、四段返しになっている点で、くだけたものを見せるのも特徴だという。孝子俊徳丸、須摩〔ママ〕の仇波、ほととぎす、沈没潜水艦等が掛けられ、大人たちがレンズを覗き、流行しているとある。

挿絵を見れば、招き看板は観音開きになるように作ってあり、「不如帰」が掛けられている。扉を開くとナミ子がハンカチを振るシーンが描かれているのがわかる。装置の方はかなり大きく、三寸



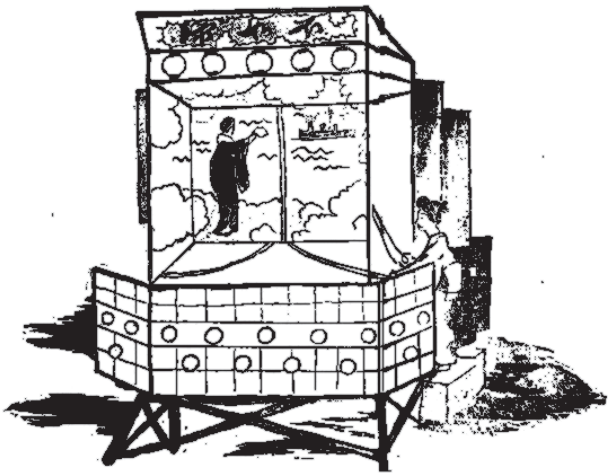
からくり

からくりは寛文四年京都四条河原の観場で阿蘭陀渡りの斗鶏（今の時計の1種）からくりを見せたのが始まりで、〈…略…〉。

明治になつて多くの人の眼にふれたものは、何と云つてもぜんまい仕掛の地獄極楽の模様であらう。これは、見世物小舎の内部一面所謂地獄極楽の気分を出し、人形の赤鬼青鬼、閻魔、亡者等がぜんまいの動くにつれてカンカンと鉦を鳴らしたり、剣の山に追はれてゐる亡者が動いたり、他愛もない子供だましみたいなものであつた。其の傍らでは、例の香具師先生が、竹の笞で空箱をぽんぽんぶん殴つて、説教師もどきで説明をすると云つたものである。此他際物を扱つたものには、日清戦争模様を同様ぜんまい仕掛で見せたものである。

――やんれ、わが忠勇の将士等は、やがて威海衛も占領なし、…（略）…などと説教するのであつた。

図 17-1 「からくり」『グロテスク』1929 年　文芸市場社



のぞきと影絵

これも明治の見世物として見逃してはならないものであらう。〈…略…〉。

のぞきの方は前項からくりと少しも相違がないと云つてもいいほどよく似てゐる。相違してゐる点は、レンズを透して内部の模様を見るといふことと、もう一つ画面が恐ろしく美しい挿絵になつてゐて、人形が動く代りに画面全体が三段返し四段返しに、説明節が終るのを待つては新しく展開されてゆくのである。番組はからくりからみるとずつとくだけたものを取扱つてゐるのも妙である。孝子俊徳丸、須摩の仇波、ほととぎす、沈没潜水艦等である。これはからくりよりも興行価値があるとみえて、今でも盛んに諸所でやつてゐる。子供の見世物かと思へばさうでもなく大供どもが大勢眼鏡に喰ひついて、さかんに流行つてゐる。ジャズ全盛の世の中とは隔世の感のあるグロテスクである。〈…略…〉。

図 17-2 「のぞきと影絵」『グロテスク』1929 年　文芸市場社

（足台のこと）に乗せられたノゾキ箱には15個のレンズが取り付けられ、下げ看板も付いている。箱の横には女性が立ち、紐を引いている様子が描かれている。現在、資料館などに保存されている覗きからくりとほぼ同じ構造になっている。

「からくり」と「のぞき」という呼称から、人形からくりを見るものは「からくり」で、画を覗いて見るものは「のぞき」ということであろう。

すなわち、昭和の始めには、「からくり」と呼ばれる人形を見せる覗きからくりと、「のぞき」と呼ばれる昼景と夜景を見せる覗きからくりの両方が並行的に存在していた。1700年ごろに箱の中にカラクリ仕掛けを取り込んだ覗きからくりはそのまま昭和まで存続し、1770年代半ばに巷間に現れた昼景と夜景を見せる覗きからくりも昭和の時代まで存続したということである。

近世の終わり頃は小さな芝居小屋のごとく世話物を掛けていたが、昭和の時代になり、「からくり」も「のぞき」も、地獄極楽もの、戦争関連の時事もの、孝子もの、流行新聞小説のネタが掛けていた。装置も1度に多くの人が覗けるように工夫改変された。すなわち、昭和の初めまでに、「からくり」は230年ほど、「のぞき」は170年ほどの長期に渡り見世物として巷間にあり続け、話題の外題を掛けながら大型化したということになる。日本独自の覗きからくりへと成長変化をしたといえよう。しかし、大型化し、日本独自の形態となっても、その基本構造は、どちらも変わることなく、そのシステムを応用し続けていた。

9. 覗きからくり、「からくり」考

(1) カラクリの変化

ここまでにいろいろな資料を確認してきたが、覗きからくりのカラクリの変化についてまとめておきたい。イギリス、オランダ、ドイツで見た覗きからくりの様子も勘案して考え、若干の推測をも含むものである。

長崎経由で持ち込まれた箱はレンズ付きで、箱の中で遠近感のある風景を見せるものだった。切り抜いた何枚かの板や絵を組み合わせて、遠近感のある場面や風景を楽しむ箱だったのではないか。

日本に持ち込まれたその箱は「からくらない覗く箱」となった。当初はピープ・ボックス（Peep-box）のように遠近感のある風景を楽しむものだったが、やや遅れてかほぼ同時期に箱の中に遠近感のある舞台があり、その中で人形を動かすタイプが入ってきた。見世物師たちは、見よう見まねで似たものを作り、当時流行していたカラクリ仕掛けの人形を箱の中に仕込んだ。「からくる覗く箱」である。最初は単純な前後左右に動くだけのものだったが、次第に複雑な動きをする人形を仕込むようになっていった。

「からくる覗く箱」は、からくり装置を取り込むことで、「覗きからくり」となった。バネやぜんまい、歯車、紐などを用いて動かす仕掛けに「絡繰」、「機関」、「機巧」の漢字を当て「からくり」と読ませた。また、「竹田からくり」、「大からくり」などの竹田からくりとの関連を示す看板を掲げた。ただし、竹田からくりを取り込んだかどうかは別である。

1770年代に入り、新たなタイプの覗きからくりが持ち込まれた。夜景を見せる覗きからくりである。遠近画法を用いて有名な都市や風景を彩色銅版画で描き、透かしとなる部分を切り抜き、裏から

色の付いた布を張り、背面からの光を利用して夜景を見せる装置である。有名都市の風景や名所の風景、大きな事件を見せるものだった。有名な風景や事件を知るためのメディアであるとともに、灯りの美しさを楽しむ夜の風景への変化、光のイルミネーションを楽しむための装置だといえる。日本に持ち込まれた夜景を見せるカラクリを持つ覗きからくりはあっという間に広がった。手品か魔術のようだと評判になり、人々を魅了した。

そして、覗き箱の奥に絵を入れ、紐を用いて画を繰り替える仕組みを持つ覗きからくりは、箱の大型化を可能にし、多くのレンズを付け、一度にたくさんの人々に見せて稼ぐことを可能にした。

箱の中に遠近感のある舞台を再現し人形を動かして（絡繰って）いた覗きからくりは、そのまま残ったものもあったし、名所、名場面を画に描き昼景と夜景を見せるものになったものもあった。両者が並行的に共存した。両者とも口上を述べ、言い立てを付け、話術とともに人々の生活の中に入り込んでいった。

覗き箱の大型化は、歌舞伎や浄瑠璃ネタの取り込みを加速させた。名所、名場面だけを１枚ずつ見せるものから一連の段ものを見せるようになっていった。袖看板や下がり看板、屋根などが付き、招き看板も大型化した。覗きからくりの芝居小屋化であり、日本独自の形態への変容である。

以上が覗きからくりのカラクリの変化である。

(2)　覗きからくり、「からくり」考

覗きからくりの「からくり」とは、バネやぜんまい、歯車、紐、板ベルトなどを用いて、人が様々な工夫を凝らすことである。巧妙な仕掛けを考え工夫することを「からくる」とし、その仕掛けをした装置そのものを「からくり」と呼んだのである。

覗きからくりのカラクリはからくり仕掛けのカラクリであり、仕掛け装置であるからゆえに「絡繰」、「機関」、「機巧」の漢字が当てられた。

呼称の変化を見れば、無名→ノゾキ→カラクリ、カラクリノゾキ→ノゾキカラクリとなっていく。箱の中を覗き込んで何かを見る、それがノゾキである。そして、仕掛けを持つことがカラクリである。人形を見せる装置も、昼景、夜景を見せる装置も同じ様にノゾキ、ノゾキカラクリと呼ばれることもあったが、強いてノゾキとカラクリを分けるとしたら、箱の中の画を覗く装置がノゾキであり、カラクリ人形を見る装置がカラクリである。

一方、覗きからくりの看板は「竹田からくり」、「大からくり」の文字を掲げるようになっていく。確かに竹田からくりを取り込んだ可能性もあるが、竹田ではないカラクリを見せても「竹田からくり」だった。つまり、カラクリと言えば竹田からくりという理解をしたが、竹田からくりと謳うから竹田からくりを見せていたわけではない。たぶんに、「竹田からくり」と看板に書くことで格付けをし、他者との差異化を図ったのだろう。それが広まり定着したと考える。ゆえに、1770 年代以降、竹田からくり芝居が下火になっても、覗きからくりが昼景、夜景を見せる装置になっても、覗きからくりの看板には「竹田からくり」と掲げられ続けられたのである。

17 世紀後半から断続的に国外から箱の中を覗き込む装置（Peep-show、Raree-show）は持ち込まれた。遠近感がある舞台や庭園などを覗いて楽しむ箱はノゾキと呼ばれた。相前後して箱の中で人形が動く装置も持ち込まれたのだろう、似たものを作り、箱の中に日本製のからくり装置（人形）を仕

込んだことでカラクリノゾキ、ノゾキカラクリ、の呼称が生じた。ゆえに、17 世紀半ばに渡来した箱の中に何かを仕込んだ装置は、1700 年を前後する頃にノゾキカラクリという呼称を持つことになった。その呼称は内容や外形が変化してもそのままに使い続けられたのである。

注

（1） 西洋の「覗きからくり」については、R・バルザー（Richard Balzer）“*Peepshows: a visual history*”（『覗きからくり ――1 つの視覚史』1998 年）を参照されたい。多くのビジュアル資料が紹介されている。

（2） たとえば、エレキテル（静電気発生装置）、マジック・ランタン（幻灯機の 1 種）、パノラマ（180～360 度の連続景観を見せる建物装置）は、外来の呼称音をそのままに用いて日本語の呼称にしている。

（3） 山本慶一　1973 年『のぞきからくり』私家版。

（4） 岡泰正　1992 年「のぞき眼鏡とは何か」『めがね絵新考』筑摩書房。

（5） ドイツのコレクターや博物館学芸員によれば、第二次世界大戦により多くの資料が焼失し、また焼失を免れたものもコレクターにより収集されているため、なかなか見ることができないという。

（6） ドイツ、ミュルハイム・アン・デア・ルール在住のフィルム史研究家であり、関連するコレクターでもある Prof. Werner Nekes 氏の談による。

（7） 坂井美香　2012 年「近世覗きからくりは何を見せたか、その 1 ―― カラクリを覗く ――」 年報『非文字資料研究』第 8 号　神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターを参照。

（8） 市島謙吉編輯　1906 年「外題年鑑」『新群書類従』第 7 国書刊公会、p708。

（9） 編者は橘忠兼。平安末期にまず二巻本『色葉字類抄』が成立し、その後増補が行われ、治承年間（1177～1181 年）に三巻本『色葉字類抄』が成立したとされる。中田祝夫、峰岸明共編　1977 年『色葉字類抄研究並びに総合索引』風間書房、「解説」p11～13 参照。

（10） 中田祝夫　1968 年『古本節用集六種研究並びに総合索引』風間書房。
中田祝夫　1970 年『文明本節用集研究並びに索引』風間書房。
中田祝夫、根上剛士共編　1982 年『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』勉誠社。
正宗甫一、室山敏昭解題　1968 年『正宗文庫本　節用集』ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会。
天理圖書館善本叢書和書之部編集委員会　1983 年「節用集天正一七年本」『天理圖書館善本叢書和書之部第 59 巻　増刊下學集　節用集天正十七年本』天理大学出版部。

（11） 福島邦道　三橋健解題　1979 年『羅葡日対訳辞書』勉誠社。

（12） 土井忠生　森田武　長南実編訳　1980 年『邦訳　日葡辞書』岩波書店。

（13） J・ロドリゲス　土井忠生訳注　1955 年『日本大文典』三省堂。

（14） 前田勇　1966 年「竹田機関」『上方演芸辞典』東京堂出版、p379 参照。

（15） 1762（宝暦 12）年『歌舞伎事始』鱗形屋八文字屋合版。金港堂編集部　1910 年『歌舞伎叢書』金港堂書籍　に所収。

（16） 加藤曳尾庵『我衣』、鈴木棠三校訂　1971 年「我衣」『日本庶民生活史料集成』第十五巻　三一書房、p9、10。

（17） 秋里籬島『摂津名所図会』巻四　1798（寛政 10）年　国会図書館蔵。また、原田幹校訂　秋里籬島『摂津名所図会』上巻　1919 年　大日本名所圖絵刊行会、p522 参照。

（18） 竹田縫之介序　出版年不明　『機関千種の実生』早稲田大学蔵。

（19） 四代目竹田近江の跡を継いだ五代目が縫之介を名乗った。竹田縫之介は明治の八代目まで続いたが、寛政（1789～1801 年）期の縫之介が機関細工の名人として有名である。前田勇　1966 年「竹田縫之介」『上方演芸辞典』東京堂出版、p379 参照。

（20） 喜田川守貞『守貞謾稿』巻二十四「雑劇」。朝倉治彦　柏川修一校訂編集　1992 年『守貞謾稿』第四巻

東京堂出版、p15。

(21)　立川昭二　1969 年『からくり』法政大学出版局。

(22)　斎藤月岑著　金子光晴校訂　1968 年『増訂武江年表 2』平凡社、p203。

(23)　前田勇　1966 年「竹田機関」『上方演芸辞典』東京堂出版、p379。

(24)　2010 年に桐生からくり人形芝居保存会、紙谷隆三氏より聞き取り調査。

(25)　桐生からくり人形芝居保存会図録制作委員会編　2011 年『図録桐生からくり人形芝居』桐生からくり人形芝居保存会、p7、8、91～94。

(26)　井上賢　1997 年「万之瀬川流域の農村からくり人形芝居」『民俗文化財調査事業報告書「薩摩の水からくり」』知覧町教育委員会　ミュージアム知覧。

(27)　山崎構成　1981 年『曳山の人形戯』東洋出版。

(28)　坂井美香　2012 年「近世覗きからくりは何を見せたか、その 1 ── カラクリを覗く ──」年報『非文字資料研究』第 8 号　神奈川大学日本常民文化研究所　非文字資料研究センター。

(29)　楢崎宗重編著　1987 年『秘蔵浮世絵大観 1　大英博物館Ⅰ』講談社、図版 100。

(30)『遊君女郎花』六丁ウ、七丁オ。江戸吉原叢刊刊行会編　2011 年『江戸吉原叢刊』第 7 巻所収。

(31)　楢崎宗重編著　1987 年『秘蔵浮世絵大観 1　大英博物館Ⅰ』講談社、図版 91。

(32)　近藤清春（生没年不詳）は鳥居派の絵師であり宝永（1704～11 年）から元文（1736～41 年）頃に活躍した。『どうけ百人一首』『江戸名所百人一首』は、浅野秀剛解題　1985 年『近藤清春画作・どうけ百人一首三部作』太平書屋　に所収。

(33)　風落着山人左角齋　1774（安永 3）年『浮世くらべ』国立国会図書館蔵。

(34)　清水晴風『晴風翁物賣物貰盡』東京都立中央図書館蔵。類書として『街の姿』がある。

(35)　猿猴庵　1806（文化 3）年～1820（文政 3）年『名陽旧覧図誌』東洋文庫蔵。

(36)　太平主人　1983 年「解題」『清水晴風筆街の姿一名晴風翁物売物貰図譜江戸編』太平書屋、p19。

(37)　和田信義　1929 年「からくり」「のぞきと影絵」『グロテスク　古今見世物寄席興行大博覧会号』文芸市場社、p200～203。